

國學院大學 経済学部

リーダーシップ基礎2025

授業評価アンケート：分析報告書

経済学部FA（9期） 奥山 怜央

リーダーシップ基礎2025

授業評価アンケート 分析報告書

國學院大學 経済学部FA(9期)

奥山 怜央

要旨

本報告書は、2025年度「リーダーシップ基礎」の授業評価アンケート結果を分析したものである。調査の結果、授業満足度は平均3.81と極めて高く、肯定回答率100%を達成した。特にFA（学生アシスタント）による「答えではなくヒントを与える」伴走支援や、心理的安全性の醸成が高く評価（3.91）され、受講生の主体的な学びを強力に牽引したことが確認された。

学習効果としては、「傾聴力」「質問力」といった対人スキルの有用性が強く実感され、「権限によらないリーダーシップ」への意識変容（パラダイムシフト）が達成された。授業への積極性スコアは開始時から終了時にかけて統計的に有意に上昇（平均78.3点→87.5点）し、特に低スコア層の意欲を底上げする成果が見られた。主な上昇要因は、クラスの熱意に感化される「ピア・エフェクト」や成長実感と考えられ、アクティブラーニングとしての成功モデルを示している。

調査目的と概要	2
調査目的	2
調査概要	3
分析結果	3
Section.1：リーダーシップ基礎への満足度・学習効果	3
Section.2：クラスの雰囲気	5
Section.3：授業準備時間	6
Section.4：ためになった授業回	7
Section.5：積極性スコア	8
Section.6：自由記述	10

調査目的と概要

調査目的

本報告書は、2025年度後期に実施した、リーダーシップ基礎 授業アンケートの結果を多角的に分析し、リーダーシップ基礎の教育における現状と課題を明確にすることを目的とする。分析結果は、今後の授業並びにFA¹活動の改善において活用する。

調査概要

調査対象	國學院大學経済学部においてリーダーシップ基礎を受講している全学生
対象科目	2025年度後期に開講されたリーダーシップ基礎
調査日	2026年1月27日（木）～1月31日（土）
調査方法	Googleフォームを用いた自記式質問紙による Web 調査
調査項目	リーダーシップ基礎への満足度、積極性の変化 他
回収状況	有効回答数：32件

¹ FA：基礎演習Aの授業において、グループワークの円滑な推進をはじめとするアクティブラーニングの効果的な実施に向けて全クラスに配置される、学生ファシリテーター＆アドバイザー。

アンケートの構成

授業評価アンケートは、合計35項目からなる選択式と自由記述形式の2つから構成される。単一回答、複数回答（チェックボックス）、SD法（5段階）、自由回答を除いた項目は、「次の点についてどのように思いますか。各項目で該当するものを1つずつ選択してください」という質問であり、各質問において、リッカート形式の4段階評価（4＝とてもそう思う、3＝ややそう思う、2＝あまりそう思わない、1＝まったくそう思わない）で回答を求めた。

分析結果

Section.1：リーダーシップ基礎への満足度・学習効果

以下は、「リーダーシップ基礎を履修して、次の点についてどのように思いますか。」という設問への回答を集計したものである。参考として、同等の設問項目がある場合は、基礎演習Bの授業評価アンケートによる平均値を付記している。

	全く そう思わない	あまり そう思わない	やや そう思う	とても そう思う	平均値 リーダーシッ プ基礎	平均値 基礎演習B
毎回の授業で 学びや気づき があった	0.0%	0.0%	15.6%	84.4%	3.84	3.60
毎回の授業に 出席するのが 楽しかった	0.0%	3.1%	21.9%	75.0%	3.72	3.24
クラスの友達 ができた	3.1%	12.5%	31.3%	53.1%	3.34	3.53
クラスの雰囲 気がよかった	0.0%	0.0%	25.0%	75.0%	3.75	3.51
リーダーシッ プ基礎の授業	0.0%	0.0%	18.8%	81.3%	3.81	3.51

に満足している						
来年以降、 リーダーシップ 応用の授業 を履修したい	0.0%	3.1%	21.9%	75.0%	3.72	
私は教員・FA とコミュニケーションを とった	0.0%	9.4%	37.5%	53.1%	3.44	3.49
FAは適切な教 え方をしていた	0.0%	0.0%	18.8%	81.3%	3.81	
FAがクラスに いてくれてよ かった	0.0%	0.0%	9.4%	90.6%	3.91	3.80
FAは適切な ファシリテー ションをして いた	0.0%	0.0%	12.5%	87.5%	3.88	
リーダーシッ プスキルにつ いて魅力を感じた	0.0%	3.1%	21.9%	75.0%	3.72	
リーダーシッ プの考え方につ いて新たな 視点が得られた	0.0%	0.0%	25.0%	75.0%	3.75	

リーダーシップ基礎の授業を通じて自分は成長したと感じる	0.0%	0.0%	34.4%	65.6%	3.66	
リーダーシップ基礎の授業を学んだことで他者との向き合い方が改善した	0.0%	0.0%	25.0%	75.0%	3.75	
リーダーシップ基礎で学んだことは今後活かそう	0.0%	0.0%	12.5%	87.5%	3.88	
FAに応募しようと考えている	25.0%	15.6%	3.1%	56.3%	2.91	

- **極めて高い授業満足度と継続履修意向**：「授業に満足している」への同意度は100%（肯定回答の合計）に達し、平均値（3.81）も「基礎演習B」を大きく上回る。また、次年度の「リーダーシップ応用」への履修意向も3.72と非常に高く、本科目が提供する「権限によらない、共有型のシェアド・リーダーシップ」という概念が、学生にとって極めて受容性の高いものとなっていることが伺える。
- **「学びの実感」と「将来への有用性」**：「学びや気づき（3.84）」および「今後活かそう（3.88）」のスコアは、全項目の中でもトップクラスである。シラバスに掲げられた「経験を重視した授業（演習形式）」を通じて、単なる知識習得に留まらず、社会人基礎力に繋がる実践的思考が鍛えられている結果と言える。
- **絶大な信頼を得ているFAの存在**：「FAがクラスにいてくれてよかった」は3.91という驚異的なスコアを記録した。これは、受講生が困っている際に「答え」ではなく「ヒント」を与えるような伴走支援が、学生の「考え抜く力」を適切にサポートしている証左である。

- **パラダイムシフトの成功**：「リーダーシップの考え方について新たな視点（3.75）」が得られたことで、受講生の多くが「カリスマ型」ではない「誰もが発揮できるリーダーシップ」の本質を理解したと考えられる。
- **行動変容への繋がり**：「他者との向き合い方が改善した（3.75）」というスコアは、シラバスの到達目標である「グループワークで求められる対人スキル」や「傾聴力」「質問力」の習得が、実生活や他者との関わりにおいて具体的に反映され始めていることを示している

Section.2：クラスの雰囲気

以下の集計は「授業のテンションは……」という設問リード文に対し「1：もっと静かな方が良かった，3：ちょうど良かった，5：もっと活気がある方が良かった」として回答してください。」という項目で回答を求めたものである。

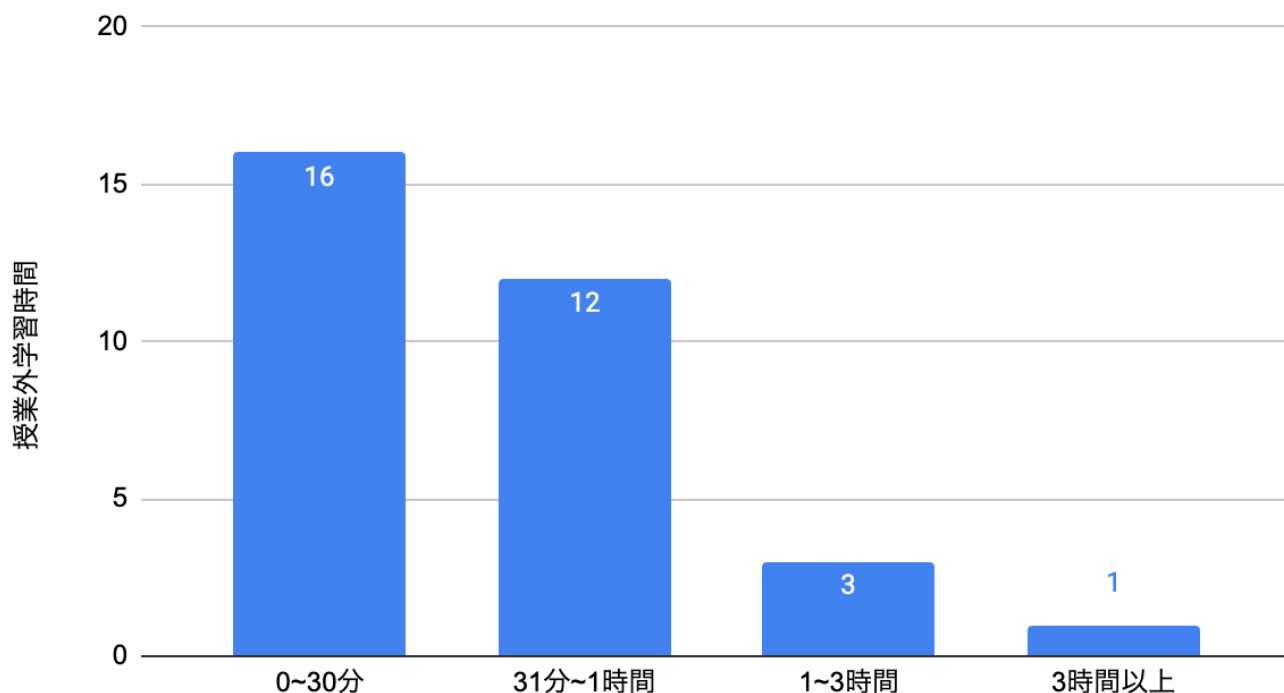
	静かな方が 良い		ちょうど良い		活気がある方が 良い
クラスの雰囲気	0.0%	0.0%	68.8%	25.0%	6.3%

- **「ちょうど良い」とする回答が約7割を占める**：回答の68.8%が「ちょうど良い（スコア3）」に集中しており，本科目の最大の特徴であるグループワーク主体の演習を行う上で，受講生の多くが現在のクラスの雰囲気を適切であると捉えている。これは，前述の「クラスの雰囲気がよかった（平均3.75）」という高い満足度を裏付ける結果であり，教員やFAによる働きかけが，円滑なコミュニケーションを可能にする「心理的安全性」の確保に成功していることを示している。
- **さらなる「活気」を求める傾向**：「もっと活気がある方が良かった（スコア4および5）」とする回答が計31.3%存在している。受講生はより熱気のある議論や，他メンバーとのより深い交流等を期待している層が一定数存在すると推察される。

Section.3：授業準備時間

以下は，「リーダーシップ基礎の授業準備に費やす時間は，平均すると1回あたりどれくらいでしたか。」という設問において，0～30分，31分～1時間，1～3時間，3時間以上のいずれかから選択してもらったものを集計したものである。

授業外学習時間

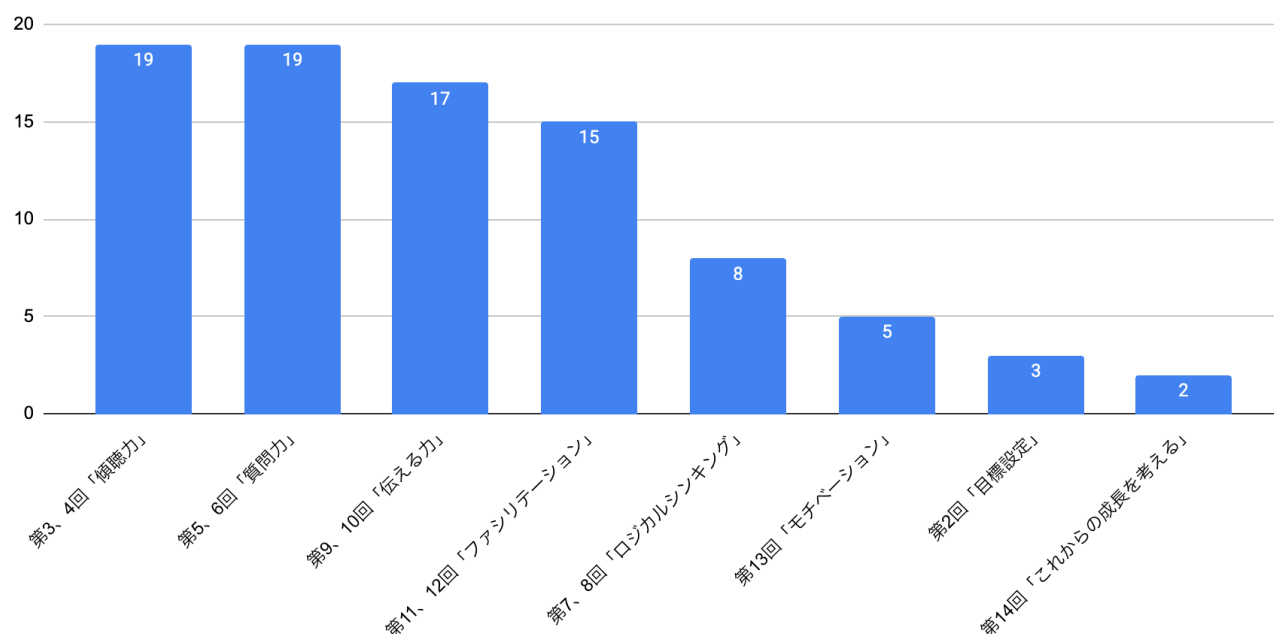


- **準備の効率化と学習サイクルの確立**：最も多い回答が「0～30分（50.0%）」であることは、短時間で集中して準備に取り組む傾向が強いことを示している。一方で、半数の学生は31分以上の時間を割いており、シラバスにある「自らが、主体的に調査、分析作業を行う」というアクティブな学習態度が一定数定着していることが伺える。

Section.4：ためになった授業回

「自分のためになったと思う授業回を以下の項目から最大3つまで選んでください。」という設問に対する回答結果を集計した。

自分のためになったと思う授業回

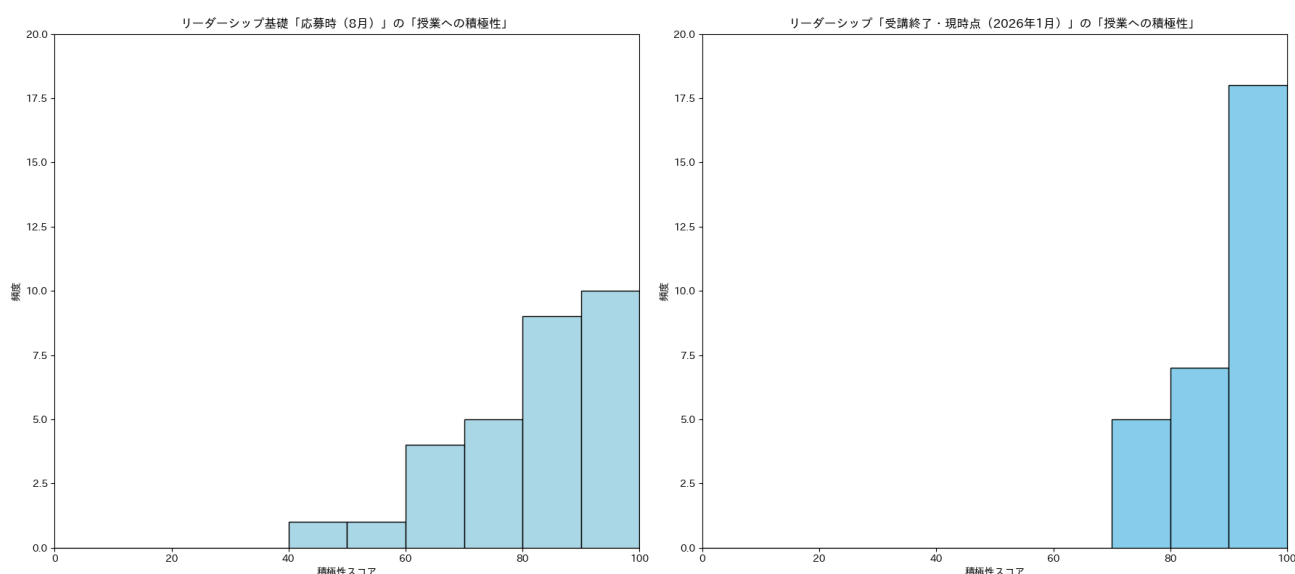


- **対人スキルの基礎となる「傾聴・質問」への強固な支持：**「傾聴力（19票）」と「質問力（19票）」が同数で首位となり、次いで「伝える力（17票）」が続いた。これらはシラバスの到達目標である「グループワークで求められる対人スキル」の根幹をなす要素である。学生は、リーダーシップを「他者を動かす力」としてだけでなく、まずは相手を理解し、相互理解を深めるためのコミュニケーションスキルとして重要視し、その習得に最も「ためになった」という実感を持っていることが伺える。
- **実践的な「場作り」への関心：**「ファシリテーション（15票）」も高い支持を得ている。これは、グループワークや議論を円滑に進めるための具体的な手技に対するニーズの高さを示している。FA（学生アシスタント）が授業内で見せるファシリテーションをロールモデルとし、自身もそのスキルを身につけたいという意欲の表れと推察される。
- **思考系スキルと概念的理解における課題：**一方で、「ロジカルシンキング（8票）」の選択数は、コミュニケーション系スキルと比較して半数以下に留まった。「論理的思考（ロジカルシンキング）」はリーダーシップ発揮に不可欠な要素であるが、対人スキルに比べて即効性や「楽しさ」を感じにくい、あるいは習得の難易度が高いと感じられている可能性がある。また、「目標設定（3票）」や「これからの成長（2票）」といった概念的・内省的な回の票数が伸びなかった点からは、学生が抽象的な概念整理よりも、明日から使える具体的な「スキル」に有用性を感じる実利的な志向が強い傾向が見て取れる。

Section.5：積極性スコア

以下は、「リーダーシップ基礎「応募時（2025年8月）」の「授業への積極性」を点数で表すとしたら何点ですか?」, 「リーダーシップ基礎「受講終了・現時点（2026年1月）」の「授業への積極性」を点数で表すとしたら何点ですか?」という2時点での授業への積極性スコアを、0から100点で回答を求め、得られた回答を集計したものである。

授業開始時から現時点までの変化



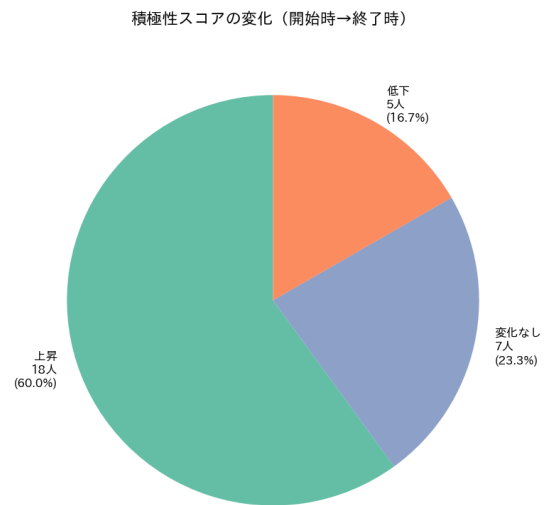
集計の結果、受講生の積極性スコアは以下のように顕著な向上を示した。

- **スコアの大幅な上昇**：平均値は78.33点（応募時）から87.50点（受講終了時）へと約9.2ポイント上昇した。対応のあるt検定の結果、1%水準での有意差が確認され、本科目を通じた積極性の向上は統計的に極めて強固であると言える。
- **積極性の底上げと均質化**：最小値が45.0点から70.0点へと大幅に引き上がっている点が特徴的である。また、標準偏差が14.817から9.892へと縮小しており、スコアのばらつきが減少している。これは、授業開始時には意欲に個人差があったものの、授業を通じて低スコア層の意欲が強く押し上げられ、クラス全体の積極性が高い水準で均質化したことを示唆している。

得点の変化傾向別の分析

応募時時（8月）と終了時（1月）のスコア変化を算出し、上昇・変化なし・低下の3群に分類した。

- 6割が「上昇」：全体の60.0%にあたる18名が積極性を向上させており、授業を通じた動機づけが有効に機能したことを示している。
- 意欲の維持・向上：「変化なし」を含めると、83.3%の学生が初期の積極性を維持、あるいはさらに高める結果となった。低下率は16.7%に留まり、多くの学生にとって学びのモチベーションが持続する授業設計であったと言える。



上昇要因：楽しさと成長実感の好循環

上昇群（18名）の自由記述を分析すると、以下の3点が主要因として抽出される。

- **心理的安全性が生む「ピア・エフェクト」**：「周りが積極的でつられた」「否定せず肯定してくれる人がいる」という記述が象徴するように、クラス全体のポジティブな雰囲気は個人の積極性を引き上げる「仲間効果（ピア・エフェクト）」が顕著に現れている。毎回異なるメンバーとのグループワークが、固定化された関係ではなく、クラス全体への信頼感を醸成したと考えられる。
- **成長実感と楽しさの好循環**：「理解していくにつれてもっと理解したくなった」「自分の成長に気づけた」という記述からは、単なる「楽しさ」だけでなく、知識やスキルの習得に伴う「有能感」の高まりが、さらなる意欲を喚起するエンジンとなっていることが読み取れる。
- **FAへの憧れと目標設定**：「FAに関心があるので上がった」「FAに挑戦したい」といった記述が見られ、身近なロールモデル（FA）の存在が、受講生の視座を「学ぶ側」から「教える側（次期リーダー）」へと引き上げ、授業へのコミットメントを強める要因となった。

変化なし要因：高水準での安定

変化なし群（7名）の記述の多くは、「最初から最後まで100点だった」「一貫してモチベーション高く受けられた」という高位安定型である。初期の期待値の高さが、授業終了時まで裏切られることなく維持された結果であり、実質的には極めて肯定的な評価と捉えることができる。

低下要因：外部環境との競合と慣れ

低下群（5名）の記述からは、授業内容への不満よりも、外部環境や物理的な制約が影響している傾向が見られる。

- **物理的・時期的要因：**「途中から6限がきつかった」「冬休みを挟んでモチベーションが下がった」など、月曜6限という遅い時間帯の配置や、長期休暇による学習リズムの断絶が集中力を削ぐ要因となっている。
- **外部活動とのリソース競合：**「公認会計士講座」など、ダブルスクールや資格試験への注力が、相対的に大学授業へのエネルギー配分を低下させるケースが確認された。これは「ビジネスゲーム」の分析でも見られた傾向であり、高学年次に向けて学生が直面する普遍的な課題と言える。

Section.6：自由記述

分析の最後に、自由記述欄に寄せられた回答を取り上げる。

FAへのメッセージ

FAに対するメッセージは、個々のFAへの愛着と、学習支援に対する感謝が溢れており、大きく以下の3点に分類できる。

- **心理的安全性の醸成と「FA劇場」の効用：**「いつも明るく雰囲気良くしてくれてありがとう」、
「ずっと笑顔だったので親しみやすかったです」といった記述が多数を占める。特筆すべきは、「FA劇場での演技力が凄まじかったです」という評価である。FAによるロールプレイング（寸劇）が、授業の雰囲気を和ませると同時に、具体的な事例を視覚的に伝える有効な教育手法として機能していたことが伺える。
- **寄り添う姿勢と適切な介入：**「困っている時に声をかけてくれました」、「優しく温かく生徒を見守ってくれてとても安心感がありました」という記述からは、FAが単なる進行役ではなく、学生の不安を取り除くメンターとして機能していたことが分かる。また、「人間としての圧力があって真似しようと思えました」という独特な表現は、FAが持つ適度な緊張感が、学生の背筋を伸ばす良い効果を生んでいたことを示唆している。
- **等身大のロールモデル：**「自分は人前に立つことに自信がなかった…という言葉にとっても勇気づけられました」という記述に象徴されるように、FA自身の失敗談や成長ストーリーが、受講生の共感を呼び、行動変容を促している。また、「お茶目なことを言うときと真剣にレクチャーしてくださっているギャップがとてもすてき」といった、先輩としての多面的な魅力が、次年度のFA応募への憧れ（潜在的な動機づけ）に繋がっている。

教員へのメッセージ

教員へのメッセージは、授業の「面白さ」と「内容の深さ」の両立に対する評価に集約される。

- **ユーモアによるエンゲージメントの向上：**「毎週、授業と先生のギャグを楽しみにしていました」、

「面白く授業を盛り上げてくれて、楽しかったです」という記述が散見される。「授業のレジューメで大腿四頭筋先生になった」といったユーモアが、90分間の授業における学生の集中力を維持し、親しみやすい学習環境を作り出す潤滑油となっている。

- **リーダーシップ観の変容**：楽しさの一方で、「言葉に強い力を感じました」、「リーダーシップに対する考え方が変わり、自分もできるのだと…可能性を感じる機会をくれてありがとうございました」という、深い内省を伴う感謝が寄せられた。教員の言葉が、学生の自己効力感を高め、行動を変えるきっかけ（パラダイムシフト）を提供していることが確認できる。